

発達障害に対する社会の認知度

－生活しやすい環境を作るには－

東京都市大学人間科学部児童学科 3年 相談援助・社会福祉研究室

市川 千彩音、須藤 彩花、富田 ひな、山田 綾香

(発達障害 生活しやすい環境 認知度)

1. 目的

発達障害に対して周囲の理解や社会における支援が不足している現状から、同世代の若者が発達障害に対してどのような印象を持っているのかを調査した。そして、生活しやすい社会を作るためには何が必要かを明らかにすることを目的とした。

2. 実践内容

・アンケート調査を実施

対象者…大学生 103 人（保育を学んでいる人 69 人、学んでいない人 34 人）

〈アンケート内容〉

① 保育を学んでいない人…発達障害に対してどのようなイメージを持っているか。

発達障害のある人とどのように関わっていくことが大切だと考えるか

② 保育を学んでいる人…関わったことがある人→関わってみてどのように感じたか。

関わったことがない人→学ぶ前にどのようなイメージを持っていたか

③ 全員…発達障害のある人とどのように関わっていくことが大切だと考えるか

3. 結果

①保育を学んでいない人

どのような障害なのか認識できていない、外で見かけたら怖い時もあるという回答が得られた。

⇒発達障害を認知していても特性や症状を正しく理解できていないことが多く、あまり良いイメージを持たれていないことが分かった。

②保育を学んでいる人

・関わったことがある人→発達障害について学ぶ前はコミュニケーションや意思疎通を取ることの難しさや関わり方への戸惑いを感じていたが、学んだことによって障害についての理解が深まったという回答が得られた。

・関わったことがない人→学ぶ前は悲観的なイメージや近寄りがたいイメージを持っていたが、学んだことによって1つの個性として受け入れができるようになったという回答が得られた。

⇒発達障害について学ぶ機会の有無によって、発達障害についての捉え方に差があることが分かった。

③ 全員

障害を正しく理解して接していくこと、適切な配慮をすること、偏見を持たないこと、障害者も平等に生活できるような社会づくりをすることが大切等という意見が出た。

4. 考察と今後の課題

考察として、障害を認知していても特性や症状を正しく理解できていないことや、発達障害についての捉え方に差があることが分かった。そのことから、発達障害について学び、関わる機会が必要、また、発達障害に対する社会全体の理解が必要であると考えられる。

発達障害について正しい理解を深めるために、一般の大学生を対象として大学で発達障害についての講義を行うことや、障害者と関わる機会を増やすために、施設に見学・体験する機会を設けること、さらに、社会を対象としてテレビで発達障害についてのドキュメンタリーを放送することや、障害の有無に関係なく、地域全体で楽しめるワークショップのようなイベントを開催することなどを提案する。

今後の課題として、以下の3点が挙げられる。

1、今回は大学生のみを対象にアンケート調査を行ったが、年齢問わず発達障害についてどこまで理解をしているかを把握する必要があること。

2、正しい理解をするためには定期的に発達障害者と関わっていくことが重要であることから、ワークショップなどのイベントの取り組みの提案をする必要があること。

3、発達障害者に対して偏見を持たない社会を作るために、その人のよさを認めて、周りがフォローできる環境づくりが必要であること。

以上の三つの課題を、今後の研究に繋げていきたい。



~~~~~

<助言者コメント>

根本 治代（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科准教授）

社会に出る前に職業等の選択で自己理解を深めていく大学生の段階において、障害理解の学習を行う意義は極めて大きいと言えます。保育を学んでいる人と学んでいない人の比較ですが、本調査での保育としての学びとして、必要となる学習内容など仮説をたてるとよいでしょう。

例えば障害に関する法律・制度や方法についての基本的な知識を学ぶ科目群や発達障害のある子どもと関わる経験として保育士実習や体験学習など、具体的に発達障害の理解に繋がる学習内容を明らかにすることで、本調査の結果とする「発達障害について学び、関わる機会が必要である」ことについて、何を学び、どのような機会なのかを詳しく検証することができるでしょう。

今回の調査結果をもとに、保育を学んでいる学生が障害理解を深めた体験学習をとおして、他の学生と意見交換し、体験を共有できるよう、その機会のあり方を提案していくなど、今後の研究に繋げていただきたいです。